英詩再入門

川崎寿彦著

名古屋大学
出版会

英詩再入門

川崎寿彦著

名古屋大学出版会

《著者略歴》
川崎寿彦（かわさき としひこ）

1929年東京に生まれる。1953年京都大学文学部英文科卒。1958年ウィスコンシン大学にてPh. D取得。1974年名古屋大学にて文学博士号取得。1977年より名古屋大学文学部教授。1989年没。著書『庭のイングランド』（名古屋大学出版会），『森のイングランド』（平凡社），『楽園と庭』（中央公論社），『ダンの世界』（研究社出版），『マーヴェルの庭』（同），『鏡のマニエリスム』（同）他。

英詩再入門

1990年12月20日　初版第1刷発行

定価はカバーに
表示しています

著者　川崎寿彦

発行者　辻　敬一郎

発行所　財団法人　名古屋大学出版会
〒464-01 名古屋市千種区不老町 名古屋大学構内
振替名古屋2-11638
電話（052）781-5027／FAX（052）781-0697

© Michiko Kawasaki 1990
Printed in Japan
印刷・製本（株）太洋社
ISBN4-8158-0148-7
乱丁・落丁はお取替えいたします。

英詩再入門 ◇ 目　　次

I　英詩再入門

序　英詩の読み方・読ませ方 ……3

第1講　W. B. Yeats, "Sailing to Byzantium" ……11

第2講　Ezra Pound, "In a Station of the Metro" ……19

第3講　T. S. Eliot, "New Hampshire" ……27

第4講　E. E. Cummings, "Chanson Innocente" ……35

第5講　Wallance Stevens, "Anecdote of the Jar" ……43

第6講　W. H. Auden, "Musée des Beaux Arts" ……51

第7講　Stephen Spender, "The Pylons" ……59

第8講　Karl Shapiro, "Travelogue for Exiles" ……67

第9講　Robert Lowell, "Colloquy in Black Rock" ……75

第10講　Dylan Thomas, "Especially when the October wind" ……83

第11講　John Wain, "Reason for Not Writing Orthodox Nature Poetry" ……91

第12講　Thom Gunn, "Considering the Snail" ……99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

II　英詩のイメジ空間

文学と空間 ……109

詩のイメジと象徴性 ……117

シンボリック・イメジと批評の実践 ……126

〈時〉はとらえられるか？ ……155
——「内気な恋人に」のこと——

イメジの奥行き ……165
——「眼が孕む」ことについて——

シェイクスピアの詩 ……184

III　英詩の深層構造

雪の降りつむ森 ……195

編者あとがき　241

人 名 索 引　245

I　英詩再入門

序　英詩の読み方・読ませ方

詩を読む作業がいかに困難なものであるかを臨床的に示したのは，I. A. Richards の *Practical Criticism* (1929) でした。しかもその本は，その困難が努力をもって克服するに値する困難であることを力説し，さらにはその克服の手段をいくつか教えてくれたのです。

それから 60 年ほどたちましたが，根本の問題はおなじと言えます。ただそのあいだに，新しい批評の武器が多少は付け加えられました。そういう視点から，有名な現代詩の例を一つ。

Stopping by Woods on a Snowy Evening

ROBERT FROST

[1874-1963]

Whose woods these are I think I know.
His house is in the village though;
He will not see me stopping here
To watch his woods fill up with snow.

My little horse must think it queer　5
To stop without a farmhouse near

Between the woods and frozen lake
The darkest evening of the year.

He gives his harness bells a shake
To ask if there is some mistake.　10
The only other sound's the sweep
Of easy wind and downy flake.

The woods are lovely, dark and deep,
But I have promises to keep,
And miles to go before I sleep,　15
And miles to go before I sleep.

これが誰の森か，私は知っていると思う。
ただし，彼の家は村のほうにある，
彼は見ないだろう　私がここに馬を止めて
彼の森が雪で満ちるのを見つめる姿を。

私の小さな馬はいぶかしんでいるらしい，
その森と氷りついた湖のあいだ
近くに一軒の農家もないのに立ち止まるのを
それも一年中でいちばん暗い夕べに。

馬はなにかのまちがいではないかと
馬具についた鈴を一ふり鳴らす。
ほかに聞こえる音といえば，やさしい風と

羽毛のような雪片が吹きすぎるだけ。

森は美しい，暗くそして深い。
しかし私には果たすべき約束がある，
そして眠るまでに幾マイルも行かねばならぬ，
そして眠るまでに幾マイルも行かねばならぬ。

Stock Response（出来合い反応）

Richards が指摘してくれたことですが，読者心理は作品の意味に対して短絡反応をおかしやすい。つまり未熟な読者は，自分の中にすでに存在する感情や思想に，作品の意味を勝手に引きつけて，ゆがめて解釈してしまうのです。Richards はこれを〈出来合い反応〉と呼び，無数の実例を列挙しました。また，たまたまこの Frost の詩については，Earl Daniels, *The Art of Reading Poetry* (1941) というアメリカの本に，大学生たちの読みの実例があげられています。多くは「われわれは誘惑に負け安楽におぼれてはならぬ。両親や恩師に約束したとおり，苦しくても勉学にはげもう」という種類の解釈でした。

極端な例かもしれません。しかしこの種の出来合い反応は，大なり小なり，作品解釈にかならずつきまとうものです。私自身がおこなった実験（『分析批評入門』）でもそうでした。私の学生たちは，室生犀星の「ふるさとは遠きにありて思ふもの」を「いくら故郷が恋しくても，都会に帰って勉学にはげまねばならぬ」という意味に解したのです。詩を読むさい，つねに心すべき危険で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

あり，ことに若い学生に読ませるときに警戒すべき点でしょう。

Characters（登場人物）Plot（筋）

新しい批評は「詩もドラマなり」という見方を強調します。とすると，そこには登場人物があり，筋があるはずです。さてこの詩の登場人物は(1)話者　(2)森の所有者　(3)馬，の三者。第1連では(1)と(2)との対照が顕著です。(1)は雪の降りつむたそがれの森の美しさに思わず魅せられてしまうような審美家・詩人タイプの人間ですが，(2)はそれらとはまったく無縁な実際家であるらしい。おそらく彼にとって森とは，何年か先に伐採して売りに出すためにだけ存在するのでしょう。

第2，3連は(1)と(3)との関係です。(3)の馬は，(1)の審美家が日常に営んでいる実際的な生活パターンに，合致するように訓練されています。したがって，歩みを止めるのは，農家でもあってそこで用事をすますときだけ。畜生の悲しさで，そのパターンを脱け出すことができません。いぶかしみ，鈴をふり，主人を目覚めさせようとします。

第4連で(1)は気をとりなおし，村へ，日常実際的な生活へとたちもどってゆきます。(2)や(3)に妥協し屈服したのでしょうか？ある意味ではそうです。しかしそれに先立って，たとえ小さくても，二つの価値意識が対立抗争するドラマが経験されました。そのうえでの決意です。とすれば(1)はわずかながらでも高められて日常生活へもどったと言えましょう。それがこの詩の〈筋〉です。

Imagery（心象）Symbol（象徴）Archetype（祖型）

これらも新しい批評が重視する要素です。この詩の視覚心象としては，雪の降り満ちる暗い森と，それにじっと見入る話者の姿が全編を支配します。そしてそれは深く象徴的，祖型的です。

まず「雪」は，古今東西を問わず，「永遠の眠り」「死」の象徴でした。Hemingway の "The Snows of Kilimanjaro" は，それをもっとも印象的に用いた一例。また Joyce の名作 "The Dead" の最後の数行もそうです。いや，もし若い学生たちがこれらの作品を知らないなら，日本語の短い実例を引いても結構。たとえば三好達治の「太郎を眠らせ，太郎の屋根に雪ふりつむ……」や，中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりにけり」が放つ，ふしぎな感動はなんでしょうか？　「雪」のイメジがひそめている，「死」「死者」への遠い暗い連想がすくなくともその一部ではないでしょうか。

つづいて「森」（ことに「暗い森」）が，無意識の欲望の〈祖型〉であるという事実。顕著な実例は Hawthorne の諸作品や Baudelaire の詩などに見られますが，若い学生たちにはグリム童話集などを教えるとよいでしょう。なお「森」に対して「村」は意識界の祖型です。するとこの詩の「森」の所有者が「村」に住み（第 1 連），話者もやがてそこへ帰ってゆく（第 4 連）という作品の筋は，無意識界から意識界への復帰という意味を帯びて来ると言えましょう。

「暗い森」が無意識の欲望，「雪」が永遠の眠りを暗示するとすれば，その森と雪にじっと見入る話者は，Freud のいう "death

wish”（死の願望）にとりつかれていることになります。これは第3連後半の聴覚心象によって強められています。その中でも“easy”“downy”（羽根ぶとんの羽毛のような）という形容詞に注目しましょう。これらが第4連の“sleep”のくり返しとあいまって，永遠の眠りへのあこがれを暗示するのです。

Meter（韻律）Tone（調子）

この詩の詩型は，正確な iambic tetrameter（弱強4歩格）。脚韻は aaba / bbcb / ccdc / dddd です。さて，詩の音韻的要素は話者の叙述の〈調子〉を精密に正確にします。その限りで，形式は意味の一部であり，意味は形式をうながします。私自身がこれまで指摘してきた意味も，作品の音韻構造に支えられてはじめて確定するものだと言えましょう。

たとえば，一見むだに見える第1連第1行の“. . . I think . . .”は，シラブルの数をそろえるための苦肉の策でしょうか？　また第2行最終の“. . . though”は，韻を踏む必要さえなければ，“But . . .”となって行頭に来てもよい種類のものでしょうか？

おそらくそうではないでしょう。第1行の“I think”はあきらかに understatement（故意に叙述をひかえめにした ironical な表現）です。それは次行の“though”の逆接機能をぐっと強めます。“though”は韻律的に，また脚韻として，あらかじめ強められている要素ですから，効果は大きい。つまり「ただし彼は村に住んでいて，いまの私とはまったく無縁の存在だ」ということで，二人の登場人物の価値観対立のドラマは，疑うべくもありません。

また，最終連最終2行の音韻効果も，強い表出機能を果たしています。dddd の脚韻，しかも第3，4行の完全なくり返しは，“sleep” という語を強調し，その意味の奥行きをいやがうえにも深めます。つまり，話者の今晩の生理的な眠り以上のものを暗示するわけです。第4行頭の “and” のくり返しが，むだどころではなく，いちばんぞっとする効果を持つのも，このせいでしょう。

*

以上がこの詩の意味のいちおうの説明です。しかし，説明は説明，作品は作品。説明はなるべく詳細で，しかも，なるべく早く忘れられるのが最上でしょう。(ことに Freud の “death wish” のように理論的にあざやかなものは，若い学生たちに別種の出来合い反応を起こさせる危険があります。) 理論が忘れられて，あとに詩自体の感動の深みとふくらみが残る——これが理想と言えましょう。なお最後には，ぜひ Frost 自身の朗読のレコードを聴きたいものです。

第 1 講

"Sailing to Byzantium"

W. B. Yeats

[1865-1939]

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.